

きもちは、 言葉を さがしている



第4話

水野 スウ

いのみら通信の由来

週いちのオープンハウス「紅茶の時間」から始まって、このところは、コミュニケーションの練習の場である「どもの時間」でしてることを細ごま綴ってきて、何事もなければその続きをまた、と思っていたのだけれど、何事もどころか、原発震災という、とてつもない一大事が起きてしまった。

いまだ過去形ではなく、今が今も進行中の、なんとおそろしい地平線に、私たちは立っているのだろう。ふるさとに帰れないかもしれない人たちの胸のうち、おさなごを抱く若い人たちの不安を思うと、もう胸がつぶれそうになる。

「きもちは、言葉をさがしている」という連載のサブタイトルは、「紅茶の時間」とその周辺。ならば今回はこれまでと違う、紅茶のもう一つの周辺について書こうと思う。

震災後の数日間は、ただただ情報を取り込むのに必死で、心臓がばくばく、ほとんど思考は停止

していた。幸いだったのは、間をおかずに「どもの時間」と「紅茶の時間」の日がやってきて、心許せる仲間たちとなんの遠慮もいらず、原発の恐怖も不安も、原発なき未来についてもいっぱい話せたことだ。

「話す」は「放す」なんだよ、きちんとまだ言葉にできない思いだって、溜めこんだまま出さずにいたら、心は便秘してしまうよ、だから話して、ちょこっとでもきもちを解き放そうね、といつも言ってきたことが、まさにわが身を通して循環したのがわかった。今回の震災で、あふれるほどの情報をインプットし続けるばかりで、出す相手がいなかったら、それはそれですごくしんどくなった人もきっと大勢いたことだろう。

毎春、調布の不思議なレストランこと、クッキングハウスにお話の出前に出かけるようになって、7年目になる。代表の松浦幸子さんからその都度、お題のリクエストが届き、それにそって語るのだけど、今年は、「いのみら通信の由来」という題でお願いしますね、とご注文主から依頼があった。

私が23年前からささやかに出している手描きの個人通信、通称「いのmira」のフルネームは、「いのちの未来に原発はいらぬ通信」。その由来を語ることは、私が原発というものに関心を持ち始めたところからのこと、一緒に原発について学び、動いて来た紅茶仲間たちとの23年をふりかえること、そして今の事態を私がどう受けとめてるか、自分にいったい何ができるか、を私の言葉で語ることだった。

正直いって、この10年あまり、私はすっかり油断していたのだ。あっちの原発でもこっちの原発でもトラブルや事故は起きてるけど、まさかチェルノブイリみたいなことは起きないだろう、そう思いたくて、原発に対しての意識は底辺で持ちながらも、前みたいには声をあげてきていなかった。いのmira通信の中味だって、原発や環境問題からだいぶ遠のいて、その時どきの私の関心事でちいさな紙面が埋まっていたように思う。

15.6年くらい前から、紅茶に来る人たちの変化——子育ての場からはじまった紅茶は、いつごろからか、いろんな悩みや問題を持った、多様な人たちがやってくる場となり——にともなって、私自身はおおいにコミュニケーションを学ぶ必要に迫られていた。

自分なりに教室に通ったり、セミナーを受講したりしながら、どこかに私や紅茶の求める“学校”はないか、ずっと探し続けていたころ出逢ったのが、東京のクッキングハウスだった。足しげく通ううち、SSTやコミュニケーションの学びはもちろんだけど、それ以上に、松浦さんのひとと接する態度や、メンバーさんたちやクッキングハウスという場そのものから教えられることがいっぱいあって、私はそんな発見をいのmiraに何度も綴っていった。

そんなふうにして私の中の優先順位が、「原発」から「コミュニケーション」へとシフトしていった時間幅が、ちょうどこの10年あまりのこと。そして今、時がひと巡りしてふたたび、だけどクッキングハウスでは初めて、いのmiraの由来、としての原発を語ることになるとは。

いのmiraが生まれるまでのこと

チェルノブイリ原発で爆発が起きた25年前、私は、当時3歳の娘の母親だった。ある人の講演会を聞きにいったら、原発事故のおそろしさにふるえあがり、ハンゲンパツに火がついた。そのころの日本の多くのお母さんがそうだったように。

紅茶は毎週、ちいさな子を持つ母親たちであふれていたから、その恐怖も一気に伝染した。でも恐怖だけで人は長続きしない。やっぱり勉強しなきゃ、と仲間たちと、たくさんの本を読み、講演会を聞きに出かけ、情報の共有がはじまった。それまで新聞とテレビだけが情報源だった私にとって、前から原発に関心を持っていた人たちが、紅茶に来て分けてくれる情報のほとんどが初耳で、「原発はトイレのないマンションって呼ばれてるんだよ、原子炉で燃やした核燃料の持って行き場は日本のどこにもないからね」ということだって、そのころ初めて知ったのだった。

そもそも原子力発電はどこから来たのか、ってよくよく考えたら、そのもとに原爆があった。核爆弾を作るために原子炉でウランを核分裂させ、分裂させたあとの放射性廃棄物の中にはプルトニウムがあり、それが取り出され、加工されて、長崎に落とされた原爆になった。

核が分裂する時のエネルギーはものすごい強大な熱を持つ。そのエネルギーで高温のお湯をわかして、そのお湯の発する蒸気の勢いでタービンをまわせば、それで電気が起こせると、誰がいつごろ気づいたのだろう。核の平和利用という名で、エネルギー資源の乏しい日本に、アメリカ側から原子力発電のすすめがあって、我が国でもこれからは原発をつくっていくんだ、という動きになったのは、皮肉にもビキニで水爆実験のあった年だった、ということも初めて知った。そんなこと、新聞には書いてなかった。

テレビと新聞からだけじゃ、ほんとのことは見えてこないんだ。テレビによく出てくる専門家という人たちの話もなんだかあやしいぞ。私はもつといのちの側に立った情報を知りたいし、仲間たちと勉強したこと、自分の頭で理解できたことだけでも、せめてまわりに知らせたい。それなら自

ら発信すること、ちいさくても自前のメディアを持つことだ。そんな私のきもちの流れの中で、いのみら通信が生まれてきたのだった。1988年4月のこと。

私にとってのいくつかの理由

通信を出すまでの間に、いろんな人の話をきいた。原発計画のある町の話、ずっと以前から原発に反対しつづけてきた学者さんや先生の話。テレビには登場しないそういう先生たちの話の方が、テレビで聞く解説や電力会社のパンフレットよりはるかにすん、と私の中で腑に落ちた。

たとえ事故が一度も起きないとしたって、原発はつねにヒバクシャを生み出すシステムだということ。燃料のウランを地中から掘り出す場面で、年に一度、原発をとめて定期点検工事する作業現場で、事故が起きた後ならさらに、使用済み核燃料の再処理工場ではそれよりさらに。使用前、使用中、使用后、のどこを切り取っても、誰かの被曝を前提にしなければ原発は動かせないのだった。

その誰かは、たいていの場合、弱い立場の人たちだ。原発労働者、と呼ばれる人たちの存在にも働かされ方にも、それまで関心を持ったことはなかった。私からは見えない沢山の人たちに被曝を強いる、ひどい差別構造の上に原発はのっかっていて、その一番上の方に、私の便利な生活があったんだ。

プルトニウムの毒の力が半分に減るまでに、24,000年もかかるとはじめて知った時は、くらくらしそうだった。今が今、原子炉の中で核分裂して発生したプルトニウムと、それから先の、気が遠くなりそうな時間の長さ。さらにはもっと半減期の長い放射性物質も、原子炉の中で生まれてくる。原発を運転し続ける限り。

その使用済み核燃料、わたし流にいうと、放射能のウンコの後始末をいったいどうするのか、最終の処分方法も処分地も決まらないまま、私たちのツケを全部、未来に押しつけることで、原発というものは動いていたんだ。

チェルノブイリ事故による放射能は、事故後ほどなく8,000キロ離れた日本にも飛んで来て、ビ

ニールハウス栽培のものより露地物の、しかも有機農業の作物の方が、そして化学飼料よりも大地の牧草を食む牛たちの乳の方が、より汚染された。25年前のことがまるでデジャブみたいに、今、日本で起きている。ある地区の牛たちにはある時期まで牧草を食べさせないように、というおふれも出て。

原発は、いのちと共存できない。そう確信した私にとって、原発に反対する理由は、あの時、もうこれらで十分だった。なんていうとたちまち、これだから無知な主婦は困る、という声が聞こえてきそうだけど、そして実際聞こえてもきたけれど、原発の本質は、エネルギー問題というより、つきつめれば放射能の問題なんだ、と思えた私にはやっぱりそれで十分だった。

1から10まで原発のこと、科学者並みにわかってないと原発やめようと言えない、っていまだに私は思わない。20数年前よりも原発についての知識が少しはふえたと思うけど、それがいったい何ほどのことだろう。東京電力の原子力発電所が事故をおこし、あの中で一体何がどうなっているのか、どうやって核をなだめ、おちつかせたらいいのか、どんな専門家にも学者にも電力会社の人にも政府にも、誰にもわかってない、ということがもうみんなにわかってしまったのだから、私からわからないってことはちっとも恥ずかしいことじゃない。

原発のタネ

原発に関心を持つまで、銀行引き落としになっていたわが家の電気料金。そのころの私は家計簿すらつけてなくて、毎月の電気料金を気にも留めてなかった。気づいたら、うわわわ……すごい高い電気料金。恥ずかしい、というなら、むしろこっちのほうがよっぽどそう。なんと、2LKのちいさなマンションで、80アンペア、真冬で一時は最高1万円をこえていた（今こう書くだけでも、恥ずかしい）。

80アンペアの内訳は、電灯が40、深夜電力の給湯器が40。電灯の方はアンペアを半分に落としてもらったけど、もう一つのアンペアはいじれな

い。それでも意識し出したらどんどん電気料金はさがり、さらに調子にのって節電しすぎて、冬の寒さにしもやけになりかけたこともある。家族にはさぞかしいい迷惑だっただろうな。

今となってはそれも笑い話だけど、なんでそんなにガンバッタか思い返すと、当時は、原発に異を唱える人には、ならばエアコン使うな、といった責めの空気が普通だったからだ。大げさにいえば、じゃあ、あなた、薪とランプで暮らせますか、みたいなおどし文句がよく聞かれたのだ。だいぶ後になってから、家庭で使う電力は全体の9%で、残り91%は企業や自治体など事業系が使っている、と知った時は、ええ～～、じゃ本気で省エネすべきはどっちよ、私のあの涙ぐましい努力って一体……とがっくり来たけど、そういう実情を知らせないこともまた、脱原発のハードルを高くするのに有効だったんだらう。

その極端な例を、つい最近も聞いたばかり。今から20年ほど前のこと、真夏でもエアコン使わず扇風機だけで汗だくになってる原発反対の人の暮らしぶりを見たある人が、「すごい、あそこまでの覚悟がなくちゃ反対なんて言えないんだ、こんな生半可な自分にはとうてい無理、ってあきらめた」と言ったのだ。

その反原発さんも、自分の節電で原発止めよう！ って意識でぐわんばっていたのかもしれない。かつての私とどこか似たり寄ったり、笑うに笑えない。そういう無理な節電、我慢生活、はかえって人を遠ざけ、一部の特別な人しか反対を言えなくさせてしまう。それじゃ本末転倒、ひょっとして私もこんなメッセージを発してなかったらうか、ひやり、とさせられた話だった。

たしかに、ちょっとやせがまん節電もした。だけど当時の私にとってそれ以上に大きかったことは、それまで無自覚だった暮らしのぜい肉に気づいたこと。それをそぎ落としていく作業の中で、自分の内側に、原発をもっと必要とする原発のタネがあったと知ったことだ。もっと便利に、もっと早く、もっと効率よく、という、もっとを求める生き方。大量生産・大量消費・大量ごみ生産、自分さえよければ、ごみのその後は知らないよ、という、“原発的”な暮らしのありよう。

はじめはただ、こわい、止めたい、から単純に出発した私だったけど、原発が切り口になって、いっぱい見えてきた社会のいびつさ、ゆがみ、差別の構造。チェルノブイリの事故から私が得たものは、原発をキーワードにして出逢い、今もつながっている大切な人たちとのネットワークもふくめて、暮らし方は生き方なんだ、という実にシンプルな生活の哲学、ものの見方、考え方だったように思う。

この春で丸19年がたった、金沢隣町の津幡での暮らし。君は紅茶を続けるだろうから、一階は部屋を区切らないで居間だけにしよう、と言い出したのは夫の方だった。あんまり電気使いたくないから、エアコンがなくても過ごせる家にしよう、居間の真ん中に薪ストーブがあったら最高だな、と言い出したのも彼だ。

なので、原発反対のスウさんだから、薪ストーブで生活してて、エアコンもないんですって、みたいに紹介されたりすると、ちょっと違うかな、と思う。反対だから〇〇、は時に、反対するなら〇〇しなくちゃ、ととられることもある。原発なしで暮らしたいと思っても、自由に電力を選べないのだから、せめてどっぷり電気に依存しないような暮らし方をしたい、と私たちが願っただけだ。

もともと風通しのいい造りの家ではあったけど、近くの雑木林から抜いてきたおさない広葉樹を庭のあちこちに植えたら、あれよあれよと木々はぐんぐん伸びて枝葉をひろげ、年々、緑のエアコンのよく効く、夏、涼しい家になっていった。近ごろよく、緑のカーテンの効用がいわれるけど、これは確かにわが家で実証済み。電気代は、金沢のマンション時代の一番高かったころの5分の1くらいになった。それって、使わなくなった電気の分だけ、家の中に架空発電所を建てたみたいなのだ。

そんな森ん中みたいな家でひらいている紅茶なので、こころ疲れた人にもきっと居心地がよく、エネルギーな金沢時代とくらべて、ゆったり静かな時間へと、紅茶の空気もゆるやかに変わっていったのだろう。そして先に書いたように、私自身の関心も、原発からコミュニケーションの学

びへと、移行していった年月だったのだ。

3.11 から見えてきたこと

3.11 後は、これまで原発にまったく関心のなかった人にも、テレビや新聞を普通に見ているだけで、はっきりわかってしまったことがいくつもある。

事故を起こした東京電力の原発内で何が起きるのか誰にもわからない、というのはもちろんその最たるもの。他にも、原子力発電って、電気を作っていない時でも、中にある燃料はまだまだ熱くて、それが熱くなりすぎるともっと大変なことが起きるので、外から電気を引いてずっとずっと水で冷やし続けなければいけないものだったんだ。使い終わった燃料も、同じ原発内にあって、それもまだずっと水で冷やし続けなきゃいけない。そもそも、どうしてそんなものがあるのか。いろいろな原発から出る使用済み核燃料は、今のところ青森の六ヶ所村に仮置きさせてもらってるのだけど、そこももう満杯なので、とりあえず自分とこの原発内においてあった、というわけか、などなど。

注意深くテレビを見てた人なら、プルトニウム、という放射性物質の名前にも敏感に反応したかもしれない。事故を起こした原発のうち一つは、ウラン燃料にプルトニウムもまぜて使っていたこと、私もすっかり気づかずにいた。ウランだけを燃やすのと比べて、このプルスーマルの方が20万倍も危険だという。

プルトニウムは、未来の夢の燃料のはずだった。原発で燃やしたウランからプルトニウムをとりだして、それを再び燃料に使うという高速増殖炉は、あたかも貴重な資源のリサイクルのようで、40年前の研究しはじめのころこそ、そこに夢を託した科学者たちだってきっといたと思う。走り出せば技術は後から追いつく、はずが追いつかず、増殖炉もんじゅは止まったままで、使えないプルトニウムは貯まる一方で、なんとか消費しなきゃならなくて、普通の原発でもまぜて燃やすことになったんだ。今回の事故さえ起きなければ、こんなプルトニウムの存在も、多くの人には知られないま

ま、増え続けていったのだから。

「こわい、でも、ないと……」

こんなにもひどい事故が起きたのだから、放射能がどれだけ人びとを恐怖にさらし、日々の暮らしをめっちゃめっちゃにするか、もうみんな十分わかったのだから、これでもう流れは脱原発だ。なんて思っていたら、とんでもない、私の考えが甘かった。事故からひと月あまりの世論調査で、原発維持の意見の方が、廃止や減らそうという意見を20%近く上回ってるではないか。

テレビの街頭インタビューで、小さな子を抱えたお母さんがこう応えていた。「こわいです。でも、ないと……」

「でも」と「ないと」の間には、「原発」の二文字が隠れている。不安は不安だけでも、原発ないと電気足りないし、もう3割も原発の電気だし、それに原発はCO₂出さないし、クリーンだし、安いし、リサイクルできるそうだし、あ、それに世界との経済競争に勝てないし、日本の力が弱くなっちゃうし。

ね、だからやっぱり原発なしじゃやっていけないよ、の思い込みは、相当に強固で、根が深い。20数年前に、実は全部が全部、ほんとなわけじゃないんだ、と気づいた者の責任は、少しでもその思い込みの呪縛をほどいていくことだろう。それには、てんで理数系でない、〇い（まるい）頭の私が私なりに理解した原発を、できるかぎりシンプルな言葉で伝えること。それが今の私にできることの一つ、と思えた。

どうしてテレビや新聞からは本当に知りたいことが伝わらないの。どうして学者たちは安全ですと言ってきたの。どうして日本にはこんなにたくさん原発があって、いくつもの原発が一カ所に集中してるの。どうして日本じゃ自然エネルギーが増えないの。いくつもの「どうして」がほどけて行く中で見えてくる、この国独特の、巨大な電力独占のかたち。

まずなんととってもCMの影響力はでっかい。電力10社+デンジレン（いつも電子レンジ、と

言い間違いそうになる) こと電気事業連合会は、マスコミのだんトツ最大スポンサーだ。でも、あれ? 独占ならコマーシャルしなくても売れるはず、と思うでしょうが、いやいや、原発が実は危険で高くつくものだと知られないためには、常にCMで安全です、と流し続けることが必要で。またマスコミに対しても、ずっと圧力をかけ続けることが大切で。原発推進にとって不都合なことを言う学者も、コメンテーターも、テレビになかなか出れなかったり、報道現場の人もニュースキャスターも、原発に関してまずいことを言うと、番組から降ろされたりしてきた。

各地の原発が事故を起こすたび、できるだけ小さな記事で取り扱うよう、電力会社の代理人である広告会社の担当さんは、すぐ放送局に縛りの電話をかけるという話も聞いた。そうやって、多くの人が「でも、ないと」って思う方向に、マスコミを動かすのも、広告代も、その経費は、みんなの支払う電気料金だ。

それにももちろん、原発は国策だもの。国からの補助金の9割が原発関連で、自然エネルギーには1割というんじゃ、新エネルギーがふえるわけもない。大学だって研究費がもらえない、反対する学者は出世できない。安全です、という子どもたち向けの副読本も当たり前配られてきた。原発はいつのまにか、電気をつくるという本来の大事な仕事よりも、政治と政府と電力会社がぐるぐる状態のまま、巨大な利権を生むシステムになってしまってたんだ。

「感」と「理」

「でも、ないと」の思い込みは、そうやってこれまで何10年もかけてすっかり刷りこまれてきたもの。長年の呪縛から自由になるってきっと容易なことじゃない。それをほどこいていく作業には「感」も「理」も必要なんだ、と思う。

「感」は、不安や怒りといった感情、そして感じる力、感性。

放射能の長い半減期を知った時、どこまで想像力を働かせられるか。防護服を来て、何ヶ月ぶりに自宅に帰る人や、放射能のせいで、畑の野菜も

採れた魚も捨てなきゃならない人や、運動場で遊べない子どもたちのきもちを、想うこと、想像すること。

「理」は、理性や理由や理論。

「でも、ないと」の根深い仕組み、作れるはずの電気を売らせず、買わずにすむ電気を買わせられてる仕組みを知ること。世界の、持続可能・再生エネルギーの拡がり、脱原発、脱石油を目指してすでに実行してる国々があること、それを可能にしてる政策や、日本でもその可能性がいっぱいあると知ること。そういった話を人にする時は、自分の中にそれなりの理由や理論の持ちあわせがないと、ちょいと突っ込まただけですぐ「でも、ないと」に逆戻りしかねないので、多少の数字やデータを得ておくのもまた必要なこと。

「感」と「理」の次にきっと大事なものは、伝え方。テーマが原発であるならなおのこと、どれだけ自分の思いを「私メッセージ」で届けられるか。誰かを悪者にしたり、責めたり非難する「あなたメッセージ」や、「正しさ」を押しつけて相手を変えようとすればするほど、一番大切なことは伝わらないし、その人の中に入ってゆかない。

このことはちょうどこの10年あまりの、クッキングハウスでのSSTや、その実際版である「ともの時間」や、コミュニケーションワークショップの中で何度も何度も気づかされ、学んで来たことだ。かつて原発を熱く語っていたころの私は、多分に攻撃的で、いいか悪いか、つい相手に迫ってしまう話し方だった気がする。どうしてわかってくれないの、と違う意見を持つ人たちを、いつの間にか責めてたようにも思い出す。

あのころの私と、今と。伝え方はだいぶ違うみたいだ。敵をつくらない、二項対立に陥らせない、聞いている人とキャッチボールをかわしながら、そのボールが受けとられてるかどうか確かめながら、私を主語にして語ってる自分がある。

そのことを、クッキングハウスで話してる途中に、私自身がはっと気づいた。そうか、原発の語りもまた、SSTやコミュニケーションの学びを活かす応用編、実践の場。「原発」からだいぶ離れて過ごしてきた私だったけど、その同じ時間、仲

間たちと一緒にコミュニケーションの練習を続けてきたことには、こんなに深い、大事な意味があったんだ。

未来に関わる一人ひとりへ

このひと月、ふた月で、原発をふくむ日本のエネルギー論議はすさまじい勢いで変わっていった。東京の出前から戻って、原発特集号みたいなのみら通信を書き上げたのが5月6日。その日の夕方、菅総理は、浜岡原発の全面停止を中部電力に要請した。

出前先でも、東海地震の震源域に建つ最も危ない原発、と言われている浜岡にだけは、原発推進／反対抜きでなんとしても、もう止まってもらわないとね、もしもまた事故が起きたら、どう謝っても日本は世界に申し訳が立たないもの、と話していたばかりだったから一層うれしく。たとえ菅さんの突然の要請が、アメリカからの圧力によるものだったとしても。それから10日たたないうちに、すべての浜岡原発が本当に止まった。二度ともう動かしてほしくないと心から願う。

菅さんはさらに、日本のエネルギー基本計画をいったん白紙にもどす、とも言っている。電力会社の独占だった送電網の分離も検討しはじめるようだ。アイスランドの地熱発電の設備は日本製だし、アメリカでは去年、ソーラーと原発の電気料金は逆転してソーラーによる発電の方が安くなった。日本でも送電網の独占が解かれて、電力が自由化されたら、スウェーデンのように自分の買いたい電気を選べる日がくるかもしれない。

これで日本のエネルギー政策が脱原発へと変わるかも！と一瞬飛び跳ねたくなったけど、いや、そうすんなりとは行くまい。変わりようが激しければ激しい分、後からきっと大きな揺り戻しが来るはず、と今から覚悟しておこう。再生可能・自然エネルギーへの期待がこれだけ高まって、でもいざ実行にうつそうとした時は、おそらくいろんな問題点がみえてきて、そしたらここぞとばかり、揚げ足とりが始まるんだ。

だからってそこで、「ほら、やっぱり、原発ないと」の波に呑み込まれてしまうのは、もういやだ。

私たちはこれまで、原発に対してあまりに寛容だった。度々の事故を許して来た。自然エネルギーに対して、せめてその半分くらいは寛容であっていいんじゃないかな、と思う。なんといっても、日本はこの方面の技術はあっても、実践では先進国より何周も遅れて、今やっとスタート地点に立とうとしてるとこなんだから。

どんなエネルギーにしたって、何かしら不具合があって当たり前、機械だから故障するのも当たり前。むしろ、54基もの原発に一気にとって代わる、絶対安全で巨大な魔法のエネルギー（ああ、これこそまさに原発的だ）なんてものが商業的に登場してきたら、谷川俊太郎さんの詩、「生きる」の中の一節、「いま生きているということ それは かくされた悪を注意深くこぼむこと」をすぐ思い出せる自分でいたいよ。

いま本当に、いのちの未来の大切な分岐点に、日本で生きる私も、あなたも、立っている。原発の崩れたあの現場に対しては何もできないけど、自分の内なる原発のタネと向き合い、未来に関わる主体性を持った一人になることはできる。自分もその一人なんだ、って自覚することで。

紅茶の時間からクッキングハウスへ、そこからさらにコミュニケーションの学びと実践へ。おかげで、紅茶だけだった時より、きもちを言葉にすること、相手を認めることの大切さをもっと実感するようになった。何より、その人が存在してくれている、というbeの意味に、深く気づけるようになった私がいる。その延長線上に、「ほめ言葉のシャワー」のワークショップがあり、同名の冊子もあるのだと思う。

今年の私の出前予定は、「ほめ言葉のシャワー」と「原発」と、くっきりふた色に分かれているように見える。でも本当はそうじゃないのかもしれない。一人ひとりそれぞれのbeを大切にすることから生まれたほめ言葉のシャワーと、一人ひとりの存在やいのちを大切にできない原発と、二つの対極を語ることは、つまりは同じ一つのことを語ることだ、とも思うから。

2011.5.24